



佐藤 正信

■有限会社佐藤設計事務所

建築士会 交流委員長

第16回 国際交流会

(公社)熊本県建築士会と大韓建築士協会-慶尚南道建築士会の交流会が平成31年4月10日、11日に行われました。10日のKKRホテルでの交流会は熊本会から37名慶尚南道会から32名の計69名の参加で人的交流が行われました。



KKRホテルでの交流会



KKRホテルでの伝統芸能披露
(南小国町吉原神楽)



矢部地区通潤酒造見学



唐人町明八橋(写真)、西村邸見学



熊本城復興状況見学



矢部地区八潮大造り物(写真)

通潤橋見学



県立美術館分館見学

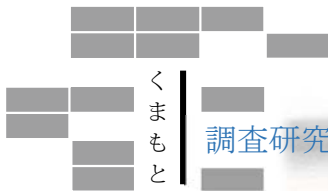


熊本県庁ルフィー像見学

交流会にご参加いただきました
会員の皆様に感謝致します。

又、開催までの計画や、開催中の
関係者の皆様のご協力に感謝致し
ます。

来年は、熊本会から慶尚南道へ
の訪問となります。会員の皆様
のご参加をお待ちしています。



く
ま
も
と

調査研究委員会から

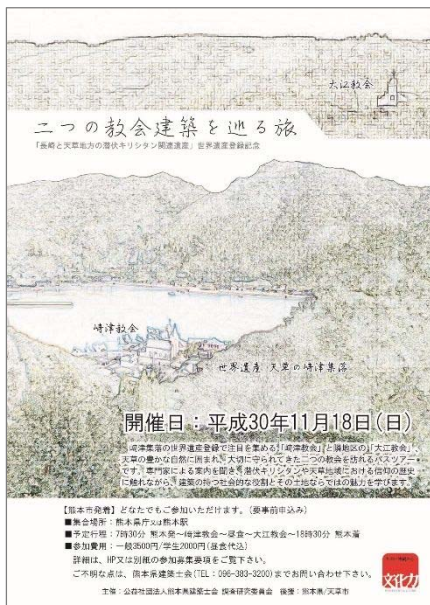


岸川 芙実

■岸川建築設計事務所

「二つの教会建築を巡る旅」 調査研究委員会活動報告

天草にある崎津教会と大江教会、二つの教会を専門家の解説と共に巡る日帰りバスツアーが開催されました。調査研究委員会が主催した同ツアーについて、準備状況と当日の様子をご紹介します。



A3 版ポスター

■二つの教会について

崎津教会と大江教会は、地元ではよく知られた存在ですが、全国的に知られるきっかけとなったのは、平成30年7月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録です。「天草の崎津集落」が構成資産として登録されたことで、集落の中心的存在である崎津教会と、峠を隔てた隣地区にある大江教会は、同じ潜伏キリシタンの歴史を伝える重要な建築物としてニュースなどにも大きく取り上げられました。

周辺環境や建築様式が対照的ともいえる二つの教会については、委員会では度々話題に上がりながらも、訪れる機会がありませんでした。しかしながら、多くの人が興味を持つ今こそ、専門的に学ぶ機会を設けたいという思いから、今回のツアー開催に至りました。

■ポスター紹介文

崎津集落の世界遺産登録で注目を集める「崎津教会」と隣地区の「大江教会」、天草の豊かな自然に囲まれ、大切に守られてきた二つの教会を訪れるバスツアーです。

専門家による案内を聞き、潜伏キリシタンや天草地域における信仰の歴史に触れながら、建築の持つ社会的な役割とその土地ならではの魅力を学びます。

■開催に向けての準備

1) 旅程の作成と各種手配

2) 案内役の依頼

地域の歴史や生活事情に詳しい案内役として、天草市立天草キリシタン館長の平田豊宏氏にご同行いただきました。

3) 後援の申請

調査研究委員会が主体となって企画運営を行う一方で、「文化の振興に寄与するもので、公益性がある」催しとして熊本県と天草市に後援を申請、承諾を頂きました。

後援を頂いたことにより、県ホームページ等でも周知され、広範囲の方に向けた発信が出来ました。

4) 広報

上記の後援行政による周知協力のほか、各大学や専門学校等へのポスター掲示、建築士会ホームページへの掲載、会員への案内チラシ配布などを行いました。

■当日のスケジュール

開催日：平成30年11月18日(日)

7:30 熊本発（県庁・熊本駅）

10:00 休憩（三角西港※世界遺産）

平田氏による事前レクチャー
（バス車内）

11:00 崎津教会見学

12:30 昼食（愛夢里）

13:45 大江教会見学

17:00 休憩（藍の天草村）

18:10 熊本着、解散

■旅の様子(当日レポート)

行楽日和、学生や子供を含む総勢47名の賑やかな旅となりました。

はじめに訪れた崎津集落では、集落入口に設けられたガイダンスセンターでバスを降り、歩いて集落を散策しました。密かに信仰を繋いだ崎津諏訪神社や新旧の崎津教会、踏絵が行われたと伝わる場所（現在の祭壇）など、熊本大学の調査研究内容までも交えながら、各所で解説が行われるため、決して広くない集落ですが、予定時間では回り切れないほどでした。

昼食後に訪れた大江教会は、集落とはやや離れた高台にあり、ふもとからのアプローチ階段は、ちょっとした修行気分を味わえます。

登り切ると、教会の礼拝堂を案内へと案内され、更なる潜伏キリシタンの歴史と信仰に支えられる教会建築について伺いました。

二つの教会建築は、いずれも、天草の自然や人々の生活に溶け込むような佇まいが印象的でした。土地に暮らす人々の生活と想いが形になる、建築の重要な成り立ちに気づかされた旅でした。

一日を終え、地域全体が世界遺産である意味をひとり考えてみると、観光客を出迎える必要はあるのだろうか、穏やかな暮らしが優先されて然るべきなのではないか、そんな思いに行きつきました。



崎津教会



鳥居から見る崎津教会



崎津の集落①



崎津の集落②



大江教会



大江教会へのアプローチ



ご案内の様子

調査研究委員会では、アートボリスを含め、県内の建築物に関する情報収集や調査研究を継続して行っております。活動の一環として、皆様にも気軽にご参加いただける企画を用意したいと考えていますので、どうぞお楽しみに！



井手 浩一郎

■熊本県立高等技術専門校

大工道具ワークショップを通じて

平成 30 年 12 月 8 日(土)に熊本県立高等技術専門校にて大工ワークショップを開催しました。『日頃触れることのない大工道具を使ってみよう』をコンセプトに色々と体験していただきました。



ティッシュボックス製作では、杉板にシナベニヤの底板をはめこみ、接着剤を塗って釘で留めます。天板は糸ノコでくり抜き、最後に紙ヤスリやサンダ(電動ヤスリ)で磨き上げて完成という単純な作業です。しかし、精度よくきれいに作るためには技術が必要です。釘が

曲がったり、玄能(金づち)のたたき跡がついてしまった方もいたようでした。



キーホルダー制作は子供たちの出番です。木のプレートに自分の名前をはんこで押し、金具を取り付けます。パパやママと一緒に上手に作っていました。中には手がインクで七色になっている子もいました(笑)。また、子供たち向けに板を動物型にくり抜いた置き物を用意していましたが、積み木みたいに高く積んで遊んでいました。

子供たちの手にかかれば何でもおもちゃになってしまいます。



簡単なようで実は難しく奥が深いのが、このカンナ削りです。カンナの削り屑が薄い程、木の表面がつるつるになり、きれいになります。初めてのカンナ削りに四苦八

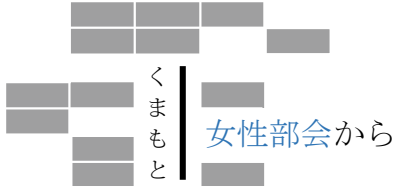
苦しながらも、2mの木材を切れることなく削り屑が出た時は、周囲から歓声と拍手が沸き起こりました。次のワークショップでは4mに挑戦してほしいと思います。



近代の木造住宅はプレカットが主流になり、大工の手間がかからない工法になっています。私が在籍する総合建築科では、刃物の研ぎ方等の基本作業から始まり、手刻みによる在来軸組み工法を指導しています。手刻みの基本を押さえれば、多岐にわたる建築工法に対応できると考えております。

自社での新築工事はもちろん、増築、リフォームといった仕事に柔軟に対応できるような人材を育てることが私の目標です。

今回、初めての試みで至らなかった点もあったかと思いますが、ご協力頂いたスタッフの皆さん、参加していただいた皆さんに感謝いたします。ものづくりはおもしろく、達成感を直に感じる事ができます。今後もワークショップやセミナーを通じて子供たちにもその楽しさを伝えていけたら嬉しく思います。



池田 祐介

■株式会社 宮田設計

熊本県建築士会 宇城支部

断層見学ツアーで学んだ事

2019年1月26日の14時16分頃、熊本県熊本地方を震源とする最大震度5弱の地震が発生しました。

地震の規模を示すマグニチュードは4.4と推定されます。

この地震で、熊本県和水町で震度6弱、熊本市北区、玉東町で震度5弱を観測しました。

今回のこの地震、2016年に発生した一連の熊本地震の活動域からは少し北に離れており、これまでに知られている活断層はないエリアで発生しています。

「えっ、そこっ!？」とそう思った方も少なからずいたのではないのでしょうか。どんなに我々がありとあらゆる知識や統計学を駆使しても、やはり大自然を完全予測しようなどやはりおこがましいのではないのでしょうか。

余談はさておき、そんな中あの



熊本地震から2年半以上過ぎましたが、今回は女性部会が企画した断層見学ツアーに参加した次第ですが、やはり一番のメインといえ、直に断層が現れているのを見学できたという事です。

無残な光景がリアルに見られ、家屋もそのまま残され、それに伴い建物や庭にも被害が及んでいた。亀裂は、地面の凹凸がひどく1m程の高低差を生じさせ、断層の影響がよく分かる震災遺構であった。肉眼でははっきり観察できるのは非常に貴重です。

今更ですがそのすごさを実感し、建物の被害からも耐震補強の重要性を認識した次第であります。

直接、自分の目で見ることによって、当時の地震の大きさを想像することができ、被害状況を伝える貴重な資料だと感じた。

我々は熊本地震を体感し被災を経験したからこそ、この貴重な出来事をもっと伝えていかなければいけないと考える今日この頃であります。



今回の女性部会が企画した断層見学ツアーではガイドの方がいらっしゃるなかで話をうかがうと、やはり被害の大きさ、地震直後の避難所対応など普段聞けないような話を聞くことができた。やはり最も考えたことは、避難生活のことである。2年半以上経過したとはいえ、継続的なケアが必要であると改めて感じた。災害復旧がどんどん進み地震の爪痕が消えていく中で、人々の記憶からも震災の記憶をいうのは事実薄れつつある。

今後状況は更に変化し、そんななか語り継ぐことの重要性を改めて認識し、熊本地震に関連した今回の女性部会が企画した断層見学ツアーでみた断層が、国天然記念物布田川断層帯に指定されたということも踏まえて、この一連の事例を県下ならびに県外にも広め、今後の防災教育や減災教育に生かしていく必要がある。

しかしながら、我々は運がいい。なぜなら震災を経験し、生きているのだから。

この記事は、まちづくり委員会山川委員長が過日、都市住宅学会の会誌に執筆された記事を掲載しています。
出典：都市住宅学会編集委員会『「都市住宅学」第104号』,(公社)都市住宅学会,2019、p.94-96

県の施策と連携した「空き家利活用マネージャー」の育成

公益社団法人熊本県建築士会

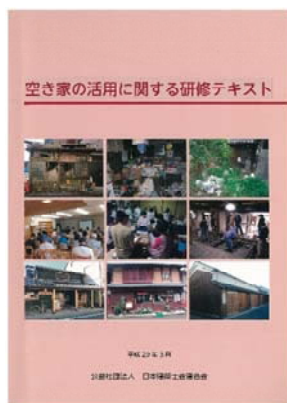
山川満清

1. はじめに

市町村の空き家対策の取り組みには対策計画策定のための協議会の設置や空き家情報の管理といった体制の整備や、空き家の地域活性化のための整備活用、古い建物の改修を促し空き家予備軍をなくすこと、空き家の除去などがあるが、これらを支援できる能力のある専門家の不足が課題となっている。県ではこれに対応するため県内の建築専門技術者を空き家の利活用等に専門的な知識を有する「空き家利活用マネージャー」として育成することを目的に事業化を図った。

一方建築士会ではかねてより大きな社会問題となっている「空き家の問題」に対し職能を活かした貢献について模索検討を始めていた。この一環の取り組みの中でも「空き家問題に精通した人材」の育成が急務であったため、公益社団法人日本建築士会連合会により平成27年度「空き家の活用に関する研修カリキュラムの考え方」を策定し、これに沿った研修テキストを平成28年度に作成、これを使った研修を平成29年度から各県建築士会で実施することになっていた。

かかる県と建築士会のそれぞれの取り組みが、相互協力のもと一本化され、県から建築士会への委託事業として実行された。運営と講師人材確保を建築士会が、講習会の広報や講習会修了者の登録・公表といった社会的信頼性の付与を県が分担している。なお、この熊本県と建築士会の取り組みのマッチングには日頃からの良好な共助体制が背景にある。



研修テキスト



パンフレット

2. 研修カリキュラムの到達目標

地域における緊急で重要な空き家対策の実施において、建築士の職能を活かした空き家の適正な管理や活用等を図るためには、空き家の建築的特性を的確に理解する建築士の活用が不可欠。建築士としての知識以外に空き家に対する基礎的な知識（不動産、相続等の関連法等）、相談業務の進め方、調査手法、管理手法、利活用の手法や事例等を学び、習得することが到達目標である。

3. 研修の概要

研修は熊本県の委託事業「熊本県空き家利活用マネージャー育成講習会」として熊本県と熊本県建築士会の共同主催の形で行われ、運営を建築士会が業務受託して行った。業務の内容はカリキュラムの検討、講習会資料の作成、講師選定及び派遣依頼、広報、講習会当日運営等となっている。

実効性の高い育成とするため受講対象者は国交省の登録講習「既設住宅状況調査技術者講習」の修了者に絞っている。36名が申込、28名が修了した。2日間の座学、半日の現地実習の日程で講師は建築士12名、県住宅課職員2名、法律（弁護士）1名、税務（税理士）1名、不動産1名で行われた。

講義は空き家問題の現状と課題を知り、空き家対策施策の基本方針を理解し、多岐にわたる関連法規に触れる。また不動産業や税務に関する基礎知識を学ぶ。具体的な事例に対応するため空き家相談会の内容を知り、その対処法を理解し、賃貸・売買・管理の業務について連携の仕組みや専門家の業務分担と連携の在り方を理解する。空き家の価値の把握のための調査の方法や維持保全の考え方も学ぶ。

利活用については類型、ネットワーク、資金計画、補助事業について基本的な計画づくり、所有者と利用者のマッチング事例でその手法を理解し、具体的な改修事例を通じ法や資金計画などの多岐にわたる知識と実践を知る。

さらにここまで学んだことの総括として、実際の空き家を使った現地実習を行なった。なお研修の具体的内容は別紙1「空き家の活用に関する研修カリキュラムの考え方」による。



講義の状況



現地実習の状況

4. 成果

- ①連携により建築士会のネットワークを活かし適切な講師の確保と受講生募集ができた。
- ②県の登録・公表がなされる公認の研修となり社会的な意味を持つことができた。
- ③建築インスペクションの講座修了を受講条件としたことから実効性の高い人材育成ができた。
- ④研修カリキュラムに沿ったテキストを使うことで効率的で一貫した講習を行うことができた。

5. 課題

今回研修そのものについての課題はあまり無く、初回ゆえの不慣れによる軽微なもの他、研修テキスト遵守の制約の中での講習内容に講座によっては窮屈さがみられたことが特筆される程度であったが、今回の研修を通し、受講生や講師から質疑等で出された今後「空き家利活用マネージャー」の活動で起きるであろう課題を以下に列記する。

- ①熊本県では空き家利活用マネージャー登録、県ホームページ、市町村への登録名簿の公表まで行うが、その後の人材活用の仕組みづくりについては未定である。
- ②相談窓口が設けてないため即応に欠け、また社会的な周知もすすまない。
- ③マネージャーの能力や判断にばらつきがあり相談者の要求に適切に応えられない場合や支障が生じる場合がある。利活用マネージャー制度への信頼がゆらぐ。
- ④建築、法律、税務、不動産の専門家間の連携の仕組みづくりは取り組みが始まっているが、まだ途上である。
- ⑤マネージャーとしての活動が組織化されていないため、マネージャー個々人の能力の不足を補う場や適正な判断へ導く場がない。(マネージャーの相談場所がない。)
- ⑥空き家の把握(リスト・マップ化とデータ更新)と連携者間でのデータ共有が十分に図られていない。

6. 今後に向けて

今後は以上の課題を踏まえ、「空き家利活用マネージャー」が社会の信頼を受け「空き家問題」解消の担い手として地域に根付いた活動ができるように「制度化」を目指すことが望ましい。このためには今回行った行政と建築士会の連携による相互共助の体制での人材育成や仕組みづくりを続けていく必要がある。具体的には組織化(協議会の設立)。人材情報の共有化。連携の方法の確立。対外的な窓口設立。人材の定期的なスキルアップ。など、これからの道のりは長く険しいが希望の光は見えている。

7. おわりに

今回の熊本県と熊本県建築士会が連携して取り組んだ「空き家利活用マネージャー育成講習会」は関与する適切な人材の育成とネットワークを構築することの重要性を示すものであるが、行政には市町村が抱える空き家問題解決の大きな課題である専門人材不足に対処する官民連携の仕組みの基礎となり、また建築士会には職能を活かした社会貢献、ひいてはストック活用の新たな「なりわい」の創出の契機となることを期待したい。